

足を測定すれば、最適な靴がわかる

トップアスリートには、「足元から勝利を支える」特別なシューズが必要だ。有森裕子、高橋尚子、野口みずきといったオリンピックメダリストをはじめ、イチローや錦織圭など数々の選手たちに、そんな「特注シューズ」をつくり続けてきたのが、シューズ工房「ミムラボ」代表のシューズ職人・三村仁司さん。特注シューズは、足の測定、設計・素材選び、裁断、縫製、成形、検査を経て完成する。なかでも、「とにかく重要なのは、いちばん最初に行う、足の測定だ」と三村さんは言う。

「足は一人ひとり個々に違います。その選手に合った靴、つまり、疲れにくい靴、故障しない靴をつくるのが大切です。でないと、激しいトレーニングや勝つ試合はできません」。そう言いながら、三村さん、「足型測定用紙」と書かれた1枚の紙を取り出し、その白紙の上に選手を立たせ、足の輪郭をボールペンでなぞって足型を描いた。続いて、メジャーで足の甲や土踏まずのアーチの高さなど17カ所を測定して、数値を記入する。一見、拍子抜けするほどアナログな測定法だ。けれど、これだけで詳細な足のサイズはもろろん、その選手の足の弱点がわかるのだと言う。

たとえば、足への体重のかかり方のバランス。人は、かかとから着地してひざに体重が乗り、蹴り出して前へ進む。左足・右足のバランスが5対5なら理想的だが、多くの人は偏りがある。測定で、左右が7対3とわかった選手に「左の股関節が痛むだろ?」と三村さんが問うと「なぜ、わかるんですか!」となる。「左のふくらはぎが張りやすいね」「右のひざが疲れるだろ」と次々に選手の弱点を言い当てていく様子は、シューズ職人を超えて、医師か占い師かと思まがうほどだ。「数値を見たらわかります」と三村さんは事もなげに言う。測定では、アライメント(腰から下の足の形態)

めざすのは世界一。金メダル。勝つためのシューズをつくり続ける。



素足の足型を写し、メジャーや三角定規で足の甲の高さなど17カ所を測定する。17カ所の測定箇所の詳細については、「企業秘密(笑)」と三村さん。この道45年で計測してきた人は、何十万人にものぼる。一般の人は左右同じサイズの靴を履くが、7割が左右で2.5mm、15人に1人は5mm違い、200人に1人は1cm違うと言う。測定をもとに、三村さんが靴の「仕様書」を書き、工房で裁断、縫製などが進められていく。

関西の名工 Master Craftsman of Kansai



スポーツシューズ製作者・現代の名工 三村仁司さん

1948年生まれ。加古川市にあるシューズ工房ミムラボ代表取締役。高校卒業後、オニツカ株式会社(現・アシックス)入社。常務選手の想像以上のシューズを提供し、勝利に貢献。選手との信頼関係は厚い。2004年現代の名工表彰。2006年「黄綬章」受章。2018年1月からは「ユニバース」専属契約を結ぶ。



靴には、軽量性、フィット性、安定性、クッション性、通気性、耐久性、グリップ性など、主に8つほどの機能性がある。軽量性を追求すれば耐久性がなくなるなど反比例する機能もあるが、「8つほどのうち、最低でも5~6つの機能性を取り入れたのが、昨年12月に発表したニューバランスの新作「HANZO V2」です」。



工房では、ウォータージェットで素材を裁断。縫製は、昔ながらの足踏みミシンを使って、ひとつずつ人の手で縫われ、靴ができあがっていく。



株式会社M.Lab(ミムラボ) 加古川市東神吉町神吉1123-1 TEL 079-432-1236

もとの。さらに3Dコンピュータで足裏の型をとる場合もある。「ケガを治すのは医者、コリをほぐすのはトレーナーができるかもしれないけど、ではケガや痛みが出ないよう、どんな靴を履けばいいのかわからないのかはシューズ職人である私たちにしかわからない」「測定で、弱いところを見つけて強くするのが、勝つための基本です」。三村さんが、青山学院大学の駅伝チームの靴をつくるようになったのは、2015年から始まる箱根駅伝連覇の約1年前。2014年の青学は5位。選手たちの足を測定すると、足首が柔らか過ぎる者が多いことがわかった。足首が上下に柔らか過ぎるとオーバーライドになり、着地がブレる。下り坂では突っ張ったような走りになり、前脛骨筋(足の前面の筋肉)が張ってしまふ。三村さんは、それぞれの選手に適したテーピングを指導。靴は、ソールを「薄い、硬い、フラットなもの」に変えた。一般的にソールは前足部が薄く踵部は厚いが、それをフラットに近づけ、クッション性も抑えることで、着地がブレにくく安定し、スピードを上げやすくした。「これで優勝できるな」と三村さんの言葉に、当初「そんなのムリですよ」と言っていた選手たち。結果は、ダントツの優勝だった。

選手のリクエストどおりには、つくらない

オニツカ(現アシックス)勤務時代の1974年、社内に新設された特注シューズづくりの部署で、この仕事を始めた。当時、特注シューズづくりを教えてください。人は誰もおらず、選手に「どんな靴がいいですか?」と要望を聞くしかなかった。「それで当初は失敗もしました」と三村さん。

経験を積んでからは、選手の要望のままにはつからない。仮に「きつい靴のほうがスピードがでる気がするから小さめに」と要望があったとしても、「あなたの足型はこうだからこういう靴のほうが良い」と経験からはもちろん、理論的にも提案できるからだ。要望を否定するのではなく、選手が思い描く以上のフィッティング、能力を最大限に引き出す最適な靴を提案するのが自らの仕事だと考える。「言われたとおりにつくならラクですよ。でもそれでは素人です」。

2000年のシドニーオリンピックで金メダルを獲得した、高橋尚子は左足が右足よりも長かった。そのため、左の股関節を痛め、足裏にマメができやすかった。三村さんは、足の長さを揃えるよう右足のソールを厚くしたシューズを高橋用につくった。「走りやすいです。マメもできません」と高橋。ところが、オリンピック直前になって、「左右の厚みが違う靴を履くと、気持ちが悪く前向きにならない。厚さを左右同じに戻してほしい」と言うんです。かなりの時間、話し合いをしたけれど、彼女の気持ちは変わらず。私は「わかった」と返事をしました」。

けれど、足の状態を考えると元に戻して良いわけがない。やはり左右の厚さの違い靴をつくる。責任は自分が持つと決めた。厚くした右靴底には硬めの素材を使ってクッション性の左右の違和感をなくし、本人にバレないよう、見た目にもソールのカットインクなどを工夫した。「私は辞表を用意して、高橋には、左右同じに戻した」と靴を手渡しました。そして、金メダル。「試合後、高橋が靴、最高でしたよ!」って。「じゃあ、靴の厚さ、変えてつくって良かったな」と言うのと、「えーっ、わからなかった」とびくりしてました」。

2009年の定年退職後も選手たちから靴製作の要望が絶えず、シューズ工房「ミムラボ」を設立して今年で10年。「世界一のシューズをつくるために、未来に挑戦していきます。普通の人は1回成功すると、過去に満足してしまふ。そうではなく、挑戦を続け、挑戦に勝って、常にステップアップしていきますよ」。